第３章　札幌の景観の特徴

第３章　札幌の景観の特徴

３－１　景観の捉え方

景観を構成する要素には、地形、植生、水辺、建築物、工作物、道路、公園、河川、人々の活動・営みなど様々なものがあります。札幌の景観を把握する際は、景観を構成する要素を個別に捉えるのではなく、これらを重層的に捉える視点が大切です（図 3-1）。

また、視点場と視対象との距離、季節や時間などによって、景観の見え方が変わることを踏まえることも大切です。

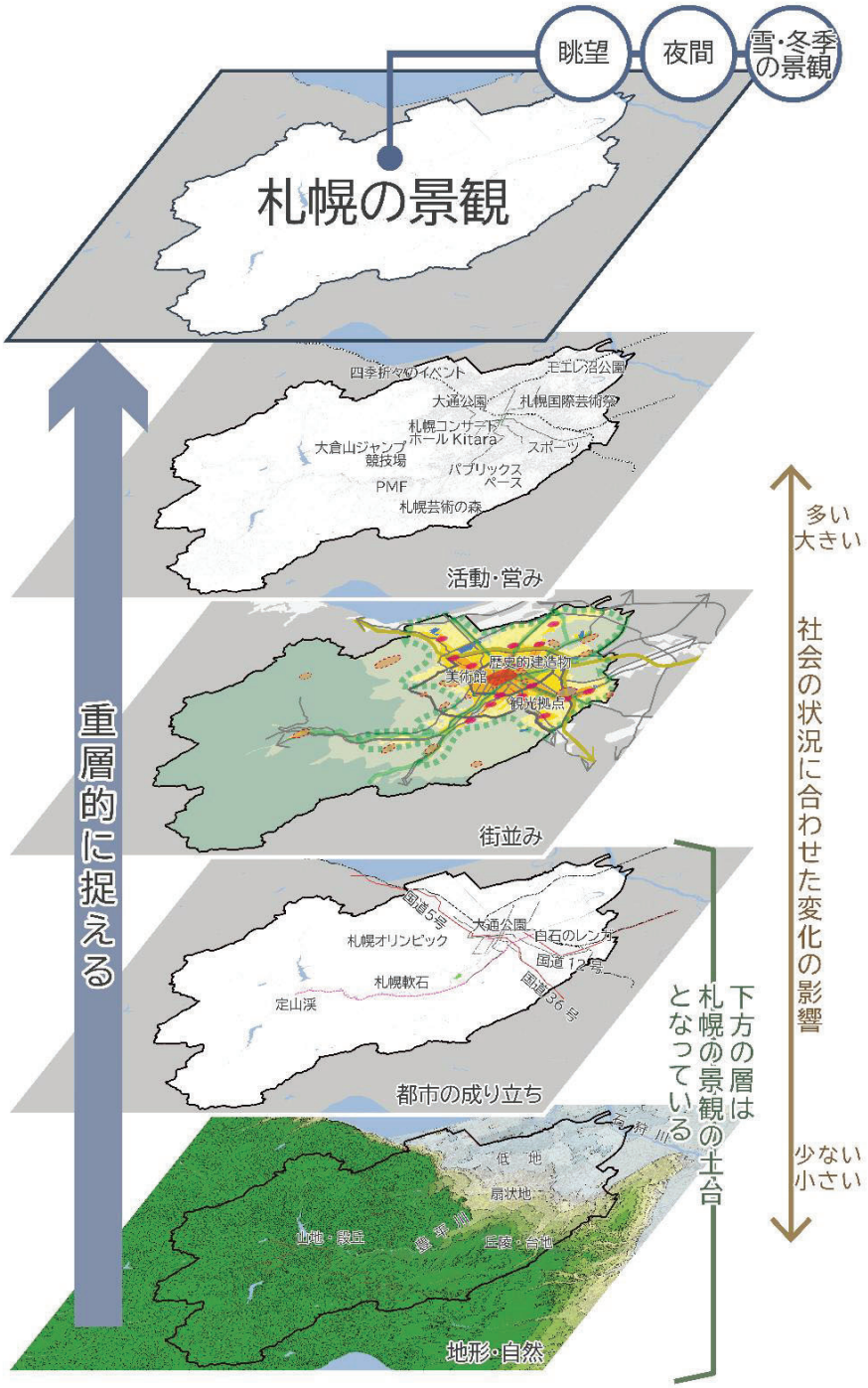


図 3-1　景観の特徴と捉え方

空間的要因

景観は、視点場と視対象との距離によって、遠景・中景・近景に分類できます。遠景・中景・近景で認識できるものは以下のような違いがあります。

遠景…山並みや空等を背景とした眺めや、山や展望台など高いところからの眺めであり、周囲の明るさや暗さによって形態を認識できます。

中景…街並みを構成する建築物や樹木等の色や形などを認識できます。

近景…建築物の外壁の素材や樹木の葉の様子などを認識できます。

※この計画においては、近景は 0.5km 以内、中景は 0.5～2.5km、遠景は 2.5km 以上を概ねの目安として設定しています。

季節・時間・気象的要因

四季の変化が鮮明な札幌では、新緑のまちから深緑のまちへ、紅葉のまちから白銀のまちへとドラマティックに色彩が変化します。

また、朝、昼、夕方、夜といった時間帯や晴れ、曇り、雨、雪などといった気象条件によっても見え方が変化します。

コラム　景観の見え方に影響を与える心理的要因

眺めは人が対象を見ることによって成立する現象であるため、時間帯や視点場などが同一条件であっても、見る人の興味、関心、価値観などによって感じ取り方が異なります。通りの眺めは、沿道の建築物、街路樹、街路灯、広告物、通りを行きかう人々や自動車などから構成されていますが、これらの構成要素の何に対して興味や関心が強いかによって注目する対象が異なることがあります。

また、眺め自体に変化がない場合でも、時の流れによって人々の価値観が変わり、感じ取り方が変化することがあります。

3－2 景観の特徴

次章以降で定める目指す姿や取組等の前提となる札幌の景観の特徴を「地形・自然」、「都市の成り立ち」、「街並み」、「活動・営み」の４つに整理します。その上で、これら４つを重層的に捉えた時に把握できる「都市の魅力」について整理します。

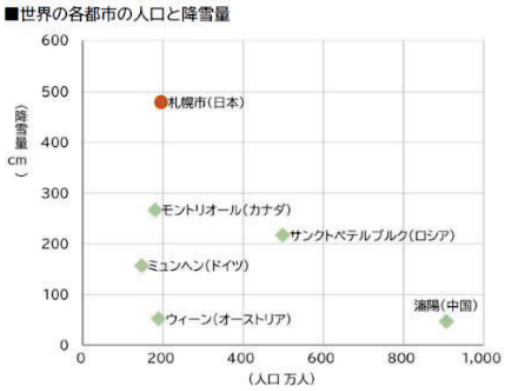
（１）地形・自然の特徴

「地形・自然の特徴」を「位置と気候」、「地形」、「水辺と植生等」の３つの観点から整理します。

位置と気候

札幌は、北半球の主要都市が位置する中緯度帯に属し、北海道・石狩平野の南西部に位置しています。札幌の気候は、日本海型気候で、夏はさわやか、冬は積雪寒冷を特徴としており、四季の移り変わりが鮮明です。

特に、冬は多雪という特徴を有しており、ひと冬の最深積雪は約１ｍ、降雪量は約５ｍに達します。このような特徴がありながら190万人を超える人口を有する札幌市は、自然と都市機能が共存する世界に類を見ない都市であると言えます。



人口と降雪量の計測年は、都市によって異なる（札幌市の人口は令和４年(2022年)現在、降雪量は平成３年（1991年）から令和２年（2020年）までの平均としている。）。人口が100万人以上で降雪地域に位置する世界の主要都市との比較

図 3-2 世界の各都市の人口と降雪量

＜資料＞札幌市「第２次札幌市まちづくり戦略ビジョン」

地形

札幌の地形は、南西部の山地・段丘から、南東部の丘陵・台地、さらには市内を流れる河川が形成した扇状地を経て、北部の低地へと連続しています。

【山地・段丘】

札幌の南西部には、市街地を囲むように藻岩山、円山、三角山、手稲山などの山々が連なっています。南東部の山林と合わせて、市域の約６割を山林が占めています。これらの山林と市街地が近接していることは、札幌の景観を特徴付けています。

また、市街地と接する山麓では、周辺の山並みのスカイライン、ひな壇状の街並み、坂、階段などが見られます。山麓にある展望の広がる公園などからは、これらと市街地の街並みが一体となった印象的な眺望を見ることができます。

【丘陵・台地】

南東部の丘陵・台地では、望月寒川、月寒川、厚別川、野津幌川などの河川ごとに波状の起伏があり、坂や崖などが多く存在します。また、波状の起伏を横断する道路や、崖線（がいせん）のみ

どりが地形を印象づけており、眺望が開けるポイントでは、遠くの山並みや低地を一望することができます。

しかし、市街化の進んだ現在では、起伏のある地形を認識することが困難であったり、丘陵・台地からの眺望を確保しにくい状況が生じています。

【豊平川扇状地】

札幌は、山地・段丘や丘陵・台地から北部の低地へと流れる豊平川がつくった扇状地上に発展しました。この扇状地では、扇端のメム（湧水）跡が現在もわずかなくぼ地になっていたり、暗渠化された小河川が格子状道路に変則性を生み出したりしています。このような微地形と大樹が織りなす印象的な景観は、札幌の原風景を想起させます。北海道大学のキャンパスや北海道大学植物園などでは、現在もこうした景観を見ることができます。

【低地】

北東部に広がる低地は、石狩川に注ぎ込む多くの河川の流域地帯であり、田園風景の地平線と防風林などの垂直要素が、近景、中景をつくり、遠景には手稲山などの山並みが加わり、広がりある印象的な景観を形成しています。

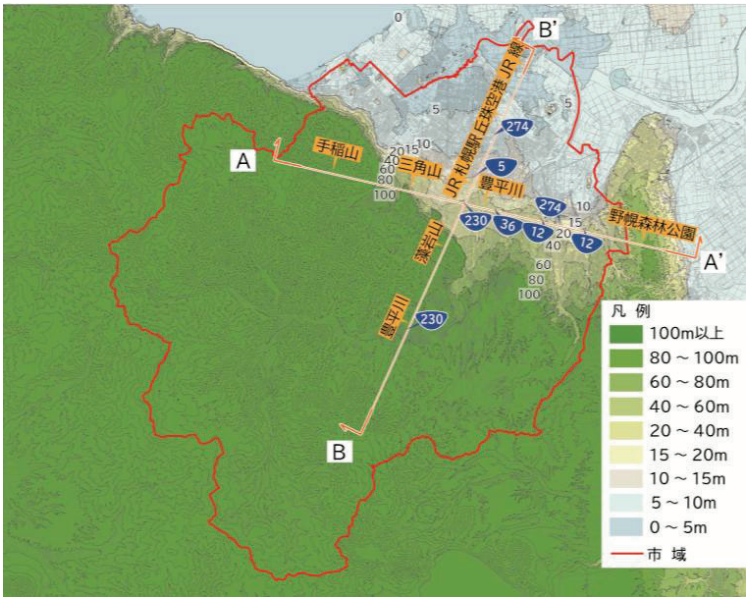


図 3-3 地形概念図

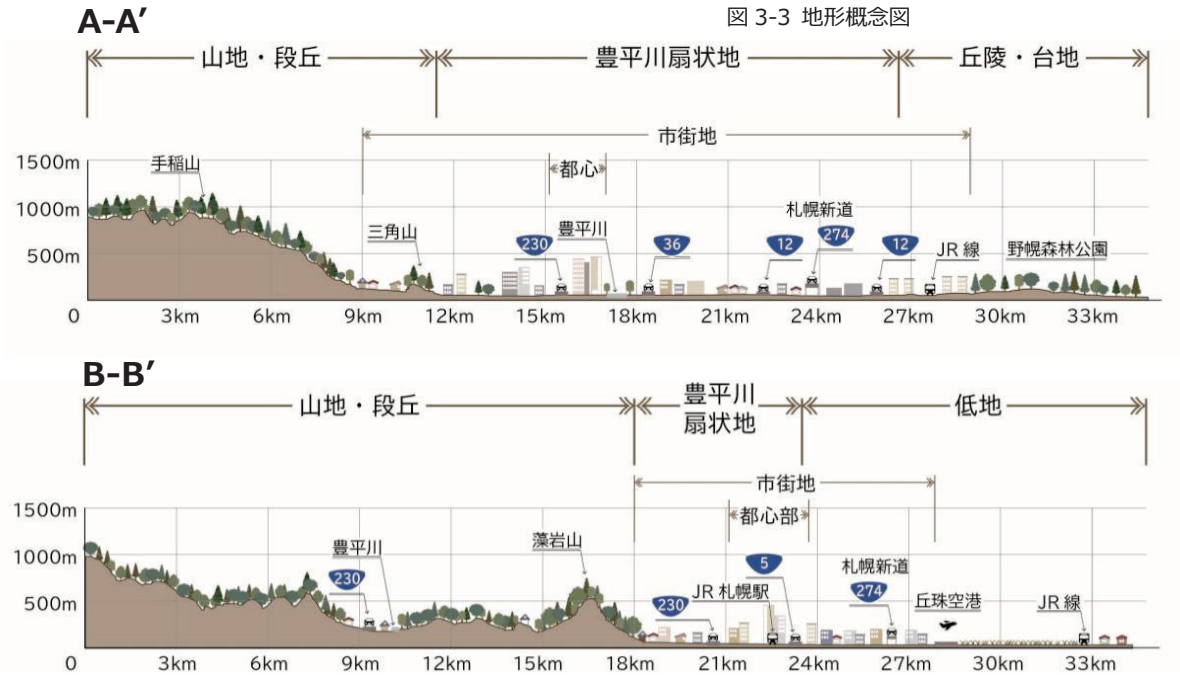


図 3-4 地形断面図

水辺と植生等

札幌には、山地を流れる上流、扇状地を流れる中流、低地を流れる下流の条件がそろっている河川があります。上流から土砂を運び、この土砂の性質と堆積する場所のわずかな高さの違いが、生育する植物に影響を与えています。

現在、人口が集中する都心部は豊平川扇状地にあり、平野で比較的水はけがよいことから、かつては、再生力の強いカシワやミズナラが多く生えていました。また、湧水等が豊富だった現在の札幌駅周辺には、ヤチダモやハルニレ（エルム）などの湿生林が広がっていました。

特にハルニレは、肥沃な土と十分な水、そして水はけのよいところに育つ木で、非常に大きく成長するため、広い空間を必要とします。北海道大学のキャンパス、北海道大学植物園、知事公館、大通公園などに育つハルニレの姿は、札幌を代表する景観となっています。

このほか泥炭層からなる低地には水に強いハンノキが多く分布しています。

また、札幌やその周辺では、北海道における野生種のうちほぼ半数の植物を見ることができると言われています。このように植物の種類が多いのは、地形・地質が多様で変化に富んでいること、気候は冷温帯と亜寒帯との移行帯で、温帯系と北方系の植物分布域が重なること、山林の多くが保安林などに指定され、保護されていることなどが主な理由です。

さらに、変化に富んだ地形や地質等を背景として、森、草原、川、里山などの多種多様な生態系が見られます。これらが生物多様性を支えながら、札幌の景観を特徴づけています。

札幌の主な樹種	
自生している 主な高木	エゾマツ、トドマツ、イチイなどの針葉樹 ハルニレ、カシワ、ハンノキ、ナナカマド、カツラ、イタヤカエデ、エゾヤマザクラ、ミズナラ、シラカンバなどの広葉樹
自生している 主な中低木	ツリバナ、ノリウツギ、エゾヤマハギ、エゾノコリンゴ、 エゾニワトコ　など
自生している 主なつる類	ツタ、ツルマサキ、ヤマブドウ、ツタウルシなど
市街地で見られる 主な外来種	イチョウ、ニセアカシア、ポプラ、プラタナス、アカナラ、ライラックなど

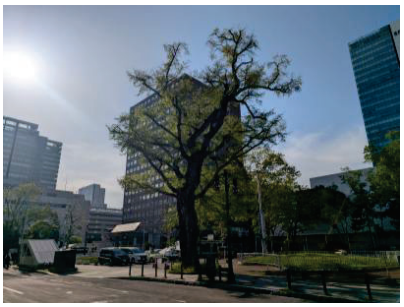


図 3-5 札幌景観資産 27 号
旧市民会館前のハルニレ

（２）都市の成り立ちの特徴

「都市の成り立ちの特徴」を「明治期」、「戦前」、「戦後」、「政令指定都市移行後」、「都市計画マスタープラン策定後」の５つに区分してこれまでの都市づくりを整理します。

明治期の都市づくり　明治２年（1869 年）～明治 32 年（1899 年）

札幌への本府建設が決定し、国による新たな都市づくりが始まりました。

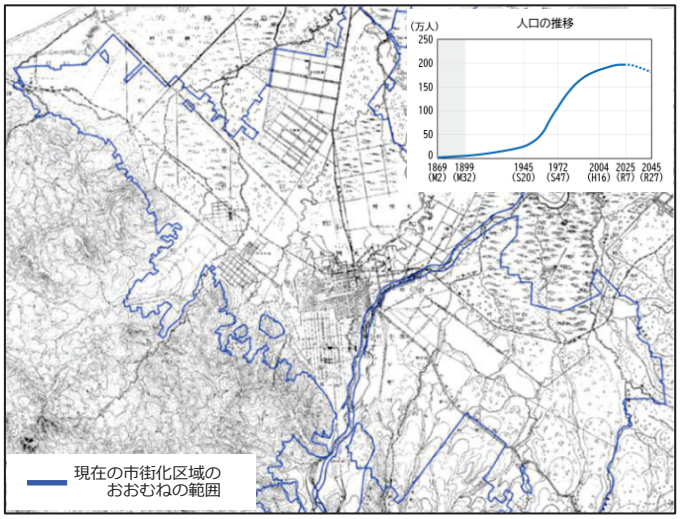


図 3-6 明治 29 年（1896 年）の札幌の市街地
<資料>(財)日本地図センター「地図で見る札幌の変遷」
明治 29 年頃の札幌（5 万分 1）を縮小・加工

【時代背景】
- 開拓使の設置：明治２年（1869 年）
- 道外からの移住

【都市づくりの主要課題】
- 国による都市としての骨格づくり

【現在の景観につながる取組】
- 大通と創成川を基軸とした 60 間四方の格子状の区画など、現在の都心の原型が形づくられました。
- 屯田兵村、山鼻村、月寒村などの衛星村落が形成されました。
- 周辺都市間、村落間を結ぶ、現在の国道５号、12 号、36 号などが形成されました。
- れんがや札幌軟石など地場建材が使用された、北海道庁旧本庁舎（赤れんが庁舎）などが建築されました。



図 3-7 札幌市街之図/村尾元長　編
（明治 24 年（1891 年））北海道大学附属図書館所蔵）



図 3-8 北海道庁庁舎正面
（明治 22 年（1889 年）頃・北海道大学附属図書館所蔵）

戦前の都市づくり　明治 32 年（1899 年）～昭和 20 年（1945 年）

自治の時代に入り、北海道の中心都市へと成長していく中で、この成長を支える公共交通機関などの整備が進みました。

特に旧都市計画法の適用（大正 12 年（1923 年））を受けてからは、様々な事業が本格的に実施されてきました。

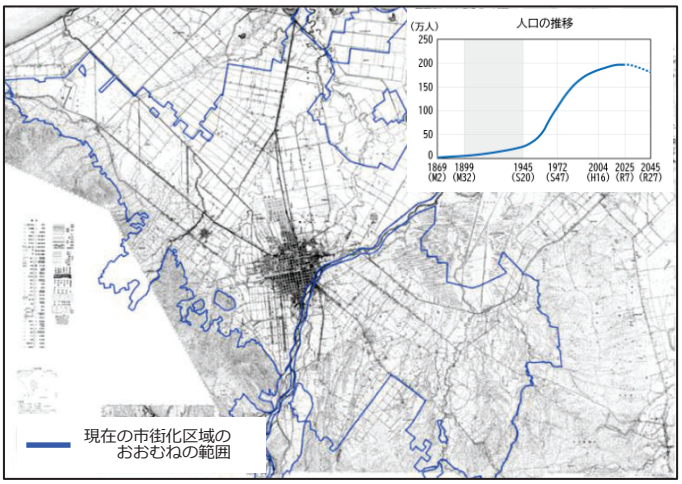


図 3-9 大正 5 年（1916 年）の札幌の市街地
＜資料＞(財)日本地図センター「地図で見る札幌の変遷」
大正 5 年頃の札幌（2 万 5 千分 1）を縮小・加工

【時代背景】

- 北海道区制施行：明治 32 年（1899 年）
- 軍需による工・鉱業発展
  ：大正 4 年（1915 年）頃
- 北海道博覧会による好況
  ：大正 7 年（1918 年）
- 市制施行　：大正 11 年(1922 年)
- 全道一の人口　：昭和 15 年（1940 年）

【都市づくりの主要課題】

- 自治の萌芽と北海道の中心都市への成長を支える基盤づくり

【現在の景観につながる取組】

- 円山や山鼻など札幌区近郊の宅地化が進みました。
- 行政機関や経済機関等の建築物が都心部に集中して建築されました。
- 馬鉄、路面電車、定山渓鉄道などの様々な交通網が発達しました。

戦後の都市づくり　昭和 20 年（1945 年）～昭和 47 年（1972 年）

人口や産業の集中が急速に進んだこの時代には、これに対応した土地区画整理事業などが積極的に実施されました。

中でも昭和 47 年（1972 年）に開催された冬季オリンピックの招致が昭和 41 年（1966 年）に決定したことは、地下鉄南北線の開通をはじめ、都市基盤の整備に一層の拍車をかけました。

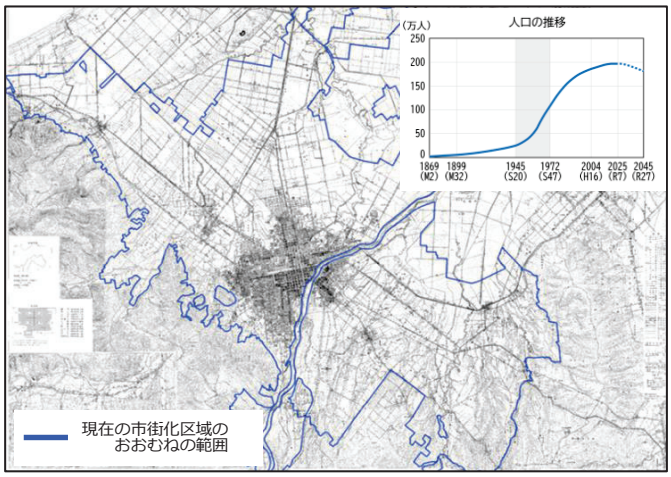


図 3-10 昭和 25 年（1950 年）の札幌の市街地
<資料>(財)日本地図センター「地図で見る札幌の変遷」
昭和 25 年頃の札幌（2 万 5 千分 1）を縮小・加工

●時代背景

・本州大企業の中心市街地への進出
　：昭和 25 年(1950 年)頃～
・急激な人口増加
・周辺市町村（札幌村、篠路村など）との合併による市域の拡大
・冬季オリンピックの招致決定
　：昭和 41 年(1966 年)

●都市づくりの主要課題

急激な人口増加や産業の集中等に対応した各種基盤整備

【現在の景観につながる取組】

- 東札幌や伏見などの地域で土地区画整理事業の積極的な実施により、道路や公園などの整備と整形な宅地の造成が行われました。
- オリンピックを前に、地下鉄南北線の開通（昭和 46 年（1971 年））や、札幌駅前通の市街地改造事業、競技場や選手村の整備などが行われました。
- 建築物の技術進展が進み、都心部では高層化が進みました。



図 3-11 札幌市街／北海タイムス社
（昭和 41 年（1966 年）・北海道大学附属図書館所蔵）

政令指定都市移行後の都市づくり　昭和 47 年（1972 年）～平成 16 年（2004 年）

人口や産業が集中する都市化の進展が続く中、新たな都市計画制度を運用し、計画的な市街地の整備・拡大を進めました。

特に市街地の郊外部では、この時代に計画的に整備された戸建住宅主体の街並みが広がっています。

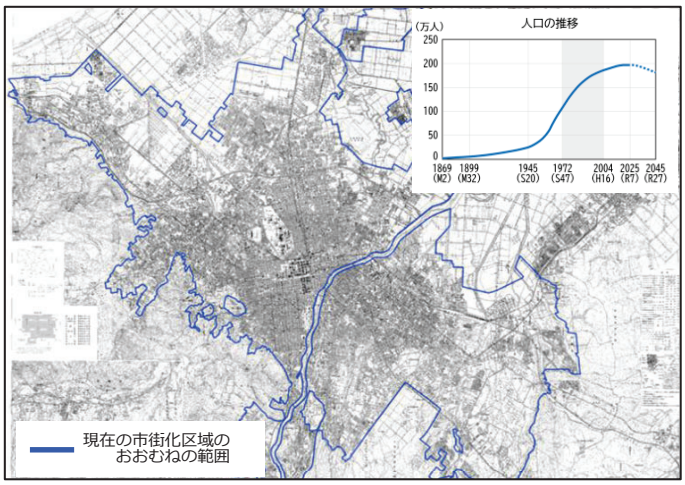


図 3-12 昭和５０年（1975 年）の札幌の市街地
＜資料＞(財)日本地図センター「地図で見る札幌の変遷」
昭和 50 年頃の札幌（2 万 5 千分 1）を縮小・加工

●時代背景

・冬季オリンピックの開催
：昭和 47 年（1972 年）
・政令指定都市への移行
：昭和 47 年（1972 年）
・継続した人口増加

●都市づくりの主要課題

市街地拡大の計画的コントロール

【現在の景観につながる取組】

- 郊外住宅地では計画的な宅地開発を誘導し、ゆとりある郊外住宅地の街並みがつくられました。
- 昭和 63 年（1988 年）に大通地区を都市景観形成地区に指定し、街並み形成の誘導を開始しました。



図 3-13 郊外の住宅地（真栄地区）

都市計画マスタープラン策定後の都市づくり　平成 16 年（2004 年）～

平成 16 年（2004 年）の札幌市都市計画マスタープラン策定以降は、人口増加が緩やかになるなど安定成熟期へ移行したこと等を踏まえ、「持続可能なコンパクト・シティへの再構築」を理念として、市街地の拡大抑制を基調とし、既存都市基盤を有効に活用しながら都市の魅力と活力を向上させる内部充実型の都市づくりを進めてきました。

平成 28 年（2016 年）の第 2 次札幌市都市計画マスタープラン策定以降は、内部充実型の都市づくりを更に進めるとともに、「低炭素都市づくり」や「安全・安心な都市づくり」といった社会ニーズに対応した都市づくりを進めてきました。

また、住宅市街地の区分に応じた人口密度の適正化や、公共交通を基軸とした各種都市機能の適切な配置を図ることを目的に札幌市立地適正化計画を策定し、持続可能な都市の形成に向けた取組を進めてきました。

都市計画マスタープランを策定してからは、一貫して内部充実型の都市づくりを進めており、特に地域の特性を踏まえたまちづくりを進めるため、地域ごとのまちづくり計画の策定や再開発の事業化に向けた取組を実施してきました。これらの取組を進めることにより、多様な都市機能の誘導や居住地としての魅力向上等、居住環境や都市の魅力・活力の向上に取り組んできました。

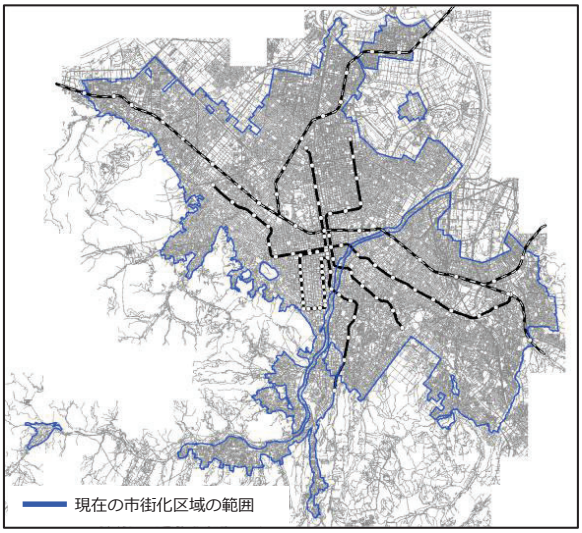


図 3-14 令和 7 年（2025 年）の札幌の市街地
＜資料＞札幌市

●時代背景

・都市の成熟
・安定成熟期に入り人口増加が鈍化
・北海道胆振東部地震の発生
　：平成 30 年（2018 年）



●都市づくりの主要課題

成熟社会を支える都市づくり

●景観形成につながる取組

・ 市街地の拡大抑制を基本とし、既存の都市基盤を有効に活用しながら都市の魅力と活力の向上に取り組んでいます。
・ 平成 18 年（2006 年）から市内のほぼ全域に高度地区を指定し、既成市街地における秩序ある街並みの誘導を開始しました。
・ 都市再生、地域ごとのまちづくり計画、市街地再開発事業や公有地の再編等による地域交流拠点の機能強化などに取り組んでいます。

（３）街並みの特徴

「街並みの特徴」を「市街地等」「道路等」「公園緑地等」「河川等」の４つの観点から整理します。

市街地等

札幌市ではこれまで、公共交通を基軸として、最も中心的な拠点である都心と地域の生活を支える地域交流拠点、それらの周辺に密度や特徴の異なる住宅地を複合型高度利用市街地、一般住宅地、郊外住宅地の３つの区分に分けて計画的に配置してきました。さらに、国際的・広域的な広がりを持つ高次な都市機能が集積する高次機能交流拠点が市内各地に展開されているほか、工業地・流通業務地が周辺市街地との均衡を保ちながら一定のまとまりをもって配置され、適切に保全された森林や農地等のみどりが市街地を取り囲むことにより、現在の都市構造が形成されています。

北海道の中心として発展してきた現在の都心は、格子状道路を基盤に商業、業務、ホテルなどの機能が集積する街並みを形成し、札幌を象徴する地域となっています。

新さっぽろ、宮の沢、琴似、麻生、平岸などの地域交流拠点は、主要な交通結節点周辺や区役所周辺などの生活圏域の拠点として、地域の豊かな生活を支えており、その地域を印象づける顔としての役割を担っています。

丘珠空港周辺、スノーリゾートエリア、円山動物園・大倉山周辺などの高次機能交流拠

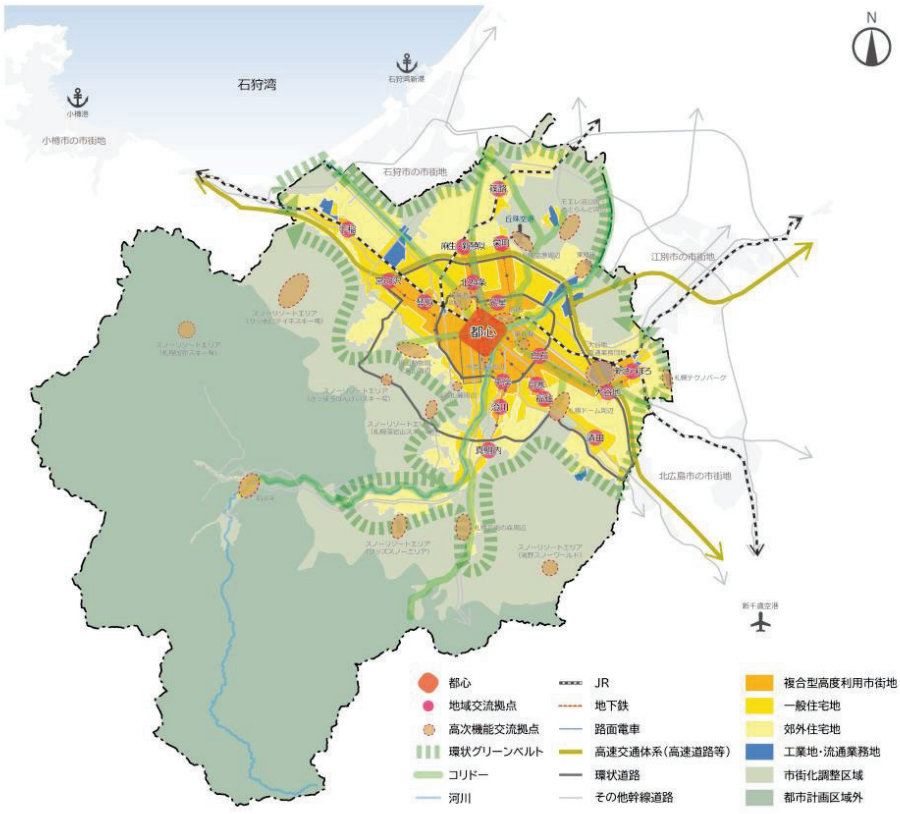


図 3-15 都市構造図

<資料> 札幌市「第３次札幌市都市計画マスタープラン」

点では産業や観光、スポーツ、文化芸術などの場所ごとに特徴のある機能が地域の街並みを特徴づけています。

円山、山鼻など古くから発展した住宅地や、あいの里、平岡などの比較的新しい住宅地は、街並みにそれぞれ固有の表情を持っています。

産業を支える工業地・流通業務地は、工業系の土地利用がなされていることによりその地域を印象づけています。

また、羊ケ丘や大倉山などの観光の拠点や、時計台、豊平館、北海道庁旧本庁舎などの札幌の歴史を物語る建築物や大通公園も札幌の個性を発信していると言えます。

そのほか、地域固有の歴史を物語る建築物や美術館、文化ホールなどの文化施設は、街並みの雰囲気に少なからず影響を及ぼしています。



図 3-16 札幌市と北広島市の市境付近から札幌の市街地を望む空撮（国道 36 号付近）

道路等

札幌の道路の代名詞となっている格子状の道路網（60 間四方の区画で構成）は、比較的平坦な地形と相まって、規則的で単調な印象を与えますが、道路における見通しの良さやわかりやすさ、軸線の強調など、特徴ある道路景観を形成しています。

山鼻や琴似、新琴似などの屯田兵村が置かれた地域には、都心部の道路とは異なる道路網があります。このような地域は独特な発展を遂げており、現在でもまちの軸性や歴史的資源など個性的な地域をつくり出しています。また、丘陵・台地は、地形に沿った曲線道路が個性的な地域をつくり出し、さらに、戦後に開発が進んだ環状や放射状の道路網は、都市全体の骨格を強く印象づける役割を果たしています。格子状の道路網と環状・放射状道路との組み合わせは、市街地をわかりやすい機能的な空間構造にしており、道路の骨格は、景観の特徴を把握するうえで大きな手がかりとなります。

環状道路は扇状地を一周し、放射状道路は丘陵地、山地、河川など、地形的特徴に沿って延びています。市外とつながる道路は、手稲山の山裾に沿って都心に向かう道路、山並みを背景に市街地を抜ける道路、緑豊かな山間部の道路、丘陵地に沿った波状の道路など様々であり、変化に富んだ道路景観を呈しています。

また、市内全域にわたって幅員８m以上の道路が非常に多く、沿道の建築物の高さとの関係性により心地よい囲まれた印象を受ける道路景観や開放感を感じられる道路景観などが形成されています。

加えて、地下鉄、ＪＲ、路面電車といった公共交通は都市活動を支える重要な交通基盤としての役割を果たすとともに、地域ごとの景観を特徴付ける要素になっています。

【地下鉄】

地下鉄は、軌道等が基本的に地下にあるため景観に与える影響は大きくはありませんが、地下鉄駅周辺は人の往来が多く、活気を感じられます。

また、南北線の南平岸駅以南に連続する高架部のシェルターは、真駒内までの景観に特徴を与えています。

【JR】

ＪＲは、軌道の一部が高架化されるなど、区間ごとに景観に変化を与えています。

また、札幌駅には、市民はもとより多くの観光客等も訪れるため、札幌駅に向かう車窓から見える風景は札幌のイメージを印象付ける景観であるといえます。

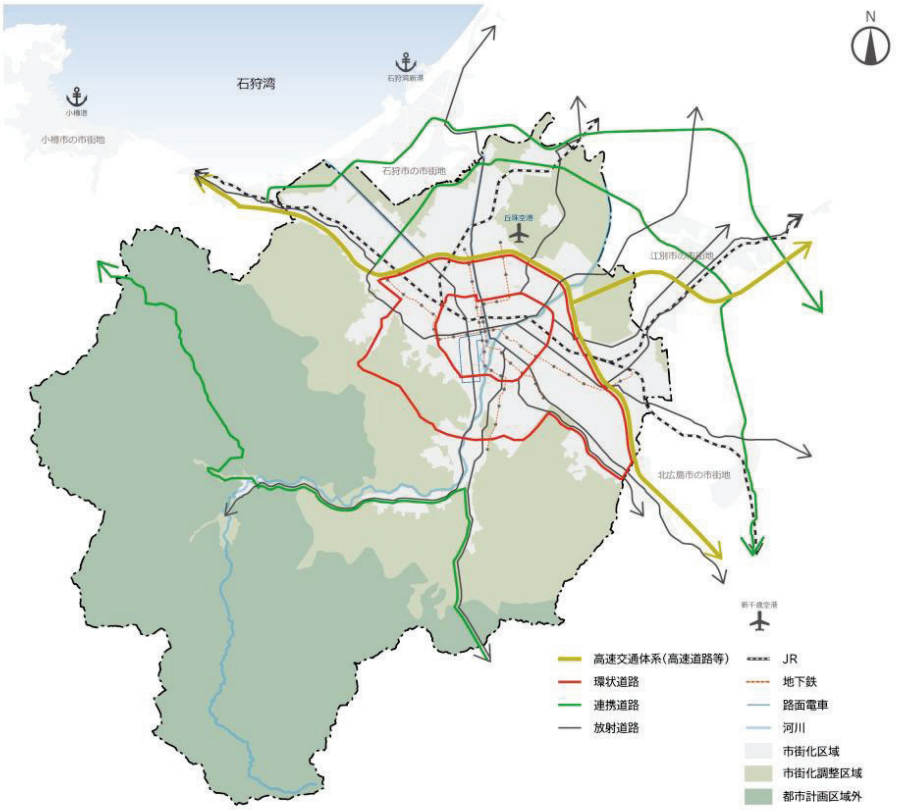


図 3-17 道路ネットワーク

＜資料＞札幌市「第３次札幌市都市計画マスタープラン」

【路面電車】

まちの中を路面電車が走る風景は札幌の特徴的な景観の一つです。平成 27 年（2015 年）に路面電車の軌道がループ化され、札幌駅前通を走る路面電車が見られるようになりました。また、線路上の雪を払いのけるササラ電車が走る様子は、地域の景観を特徴づけています。



図 3-18 まちの中を路面電車が走る景観

公園緑地等

札幌市では、昭和 57 年（1982 年）に「環状グリーンベルト構想」を策定し、札幌の自然条件を生かして、市街地をみどりの帯で包み込むように森林や農地の保全・大規模公園の整備を進めてきました。現在は、特色のある大規模な都市公園を含む環状グリーンベルトと、道路緑化や河川で構成されるコリドーにより、骨格的なみどりのネットワークが形成されています。

現在、都市公園の数は 2,700 カ所を超え、公園の総量は充実しています。一方で、地域によっては身近な公園が不足しているなど、状況の違いが見られます。

また、道路緑化については、ハルニレやヤマモミジなどの郷土種の落葉広葉樹といった北国らしい特徴ある街路樹を中心とした景観の形成に取り組んでいるほか、地域住民の協力を得て街路樹ますや植樹帯で花壇づくりを行うなど、地域住民が主体の景観の形成も行われています。



図 3-19 札幌駅前通の街路樹がつくる景観



図 3-20 活用促進景観資源第 2 号
ラベンダー通りを中心とした宮の沢中央地区の
取組がつくる景観

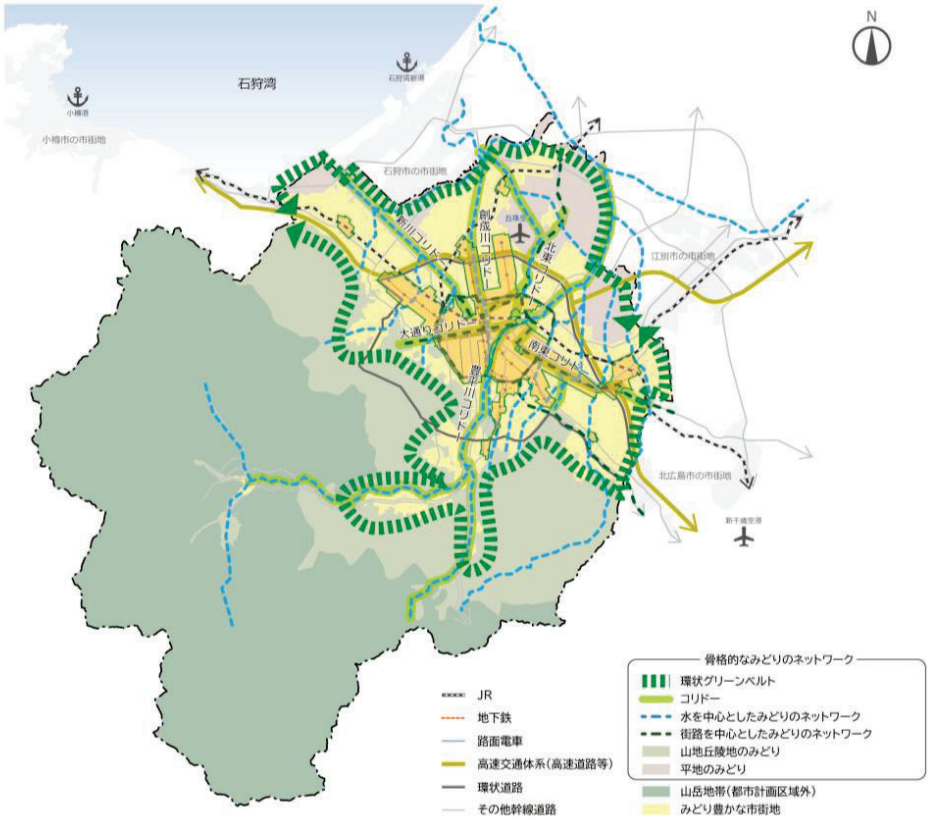


図 3-21 骨格的なみどりのネットワーク
＜資料＞札幌市「第 3 次札幌市都市計画マスタープラン」

河川等

札幌市には支流を含めると約 600 本の河川が流れています。明治期に都市づくりの場となった扇状地を形成した豊平川や都市計画の基軸となった創成川は、都市形成に重要な役割を果たしました。明治期のまちづくりは、豊平川扇状地特有の豊かな水の恵みを有効に生かして進められました。豊富な伏流水やメムは、工場用水や生活に潤いを与える園池として生かされ、また、創成川、新川という運河は水運の要として利用されました。このように札幌市は本来、豊かな水辺環境を持つ都市といえます。しかし、開発とともに扇状地の保水力が落ちて水が枯れ、また、河川が暗渠化されるなど、現在の扇状地は豊かな水辺のある地域という印象が薄れています。

札幌の水辺風景は、平地を蛇行する川幅の広い河川と葦原（あしはら）、丘陵地の谷筋に沿った小河川と崖線（がいせん）の緑地など、地形との関係で変化に富んだ特徴が見られます。これらは、それぞれに札幌の水辺のイメージを想起させる地域固有の水辺環境であり、地形と河川と植生が一体に捉えられる場として、「地域らしさ」や「その場らしさ」を感じさせる貴重な要素となっています。

景観を特徴付ける主要な河川

【豊平川】

南西部の山地から北部の平地へと市街地を貫流する豊平川は、札幌市の代表的な河川です。橋を渡るたびに眺められる山並みのスカイラインと街並みのコントラストは、札幌の特徴的な景観の一つとなっています。



図 3-22 豊平橋から望む豊平川・山並み・街並み

【創成川】

創成川は、農業用水や生活用水の供給を目的として開削が行われ、その後、使われ方や流路を変更しながら現在の姿になりました。札幌の東西を分ける基軸であり、歴史的にも大きな意味を持つ河川です。昭和 30 年頃までの河畔は心地よく散歩したり休んだりできる場所でしたが、その後、両側が道路に挟まれた人工的なコンクリート護岸の河川に姿を変えました。



図 3-23 創成川と創成川公園

現在では、南４条から北１条間の両岸は創成川公園として整備され、都心部の中で水辺を感じられる貴重な空間となっています。

【新川】

新川は、札幌市北部の湿地帯を農業用地として活用することなどを目的として開削された、都心部から石狩湾に一直線に伸びる河川です。河川の堤防沿いには、平成 10 年(1998 年)から 3 年をかけて地域住民の手によって植樹された全長 10.5ｋｍもの桜並木があり、特徴的な景観を形成しています。

（4）活動・営みの特徴

人々の活動や営みには、景観の一部となって人々の目に映し出されるものがあります。

札幌には札幌芸術の森やモエレ沼公園などの施設があるだけでなく、札幌国際芸術祭やパシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）などのイベントが開催され、国際的な文化芸術に触れることができます。施設やイベントに向かう人々の動きや楽しむ様子は、札幌らしい景観を形づくる要素の一つと言えます。

また、冬季には大倉山ジャンプ競技場で行われる国際的なジャンプ競技の様子から都心部でクロスカントリーを楽しむ人々の様子まで、冬のスポーツに親しむ様子が景観の一部となっています。

初夏の訪れを告げる「YOSAKOI ソーラン祭り」、開放的な雰囲気で夏を楽しむ「さっぽろ大通ビアガーデン」、北海道の食を一度に楽しめる「さっぽろオータムフェスト」、幻想的な雰囲気に包まれる「さっぽろホワイトイルミネーション」、そして世界中から多くの観光客が集まる「さっぽろ雪まつり」など年間を通して四季折々の多彩なイベントが開催され、多くの市民や観光客でにぎわう様子を捉えることができます。

街中のオープンカフェや広場などのパブリックスペースでくつろぐ人々は、札幌の暮らしを映し出し、まちの雰囲気を伝えてくれます。

このように人々の活動やこれまで築き上げてきた文化・営みは札幌らしい景観をつくる大切な要素であると言えます。

コラム　Well-Moving City SAPPORO

「Well-Moving City SAPPORO」は、歩くことを中心に、居心地の良さやみどり、誰もが移動しやすい環境を大切にし、四季を通じて心地よく過ごせる「心も一緒に動くまち、札幌」を目指す札幌独自の都市空間ビジョンです。人々が歩き、集い、くつろぐ姿は、まちのにぎわいや魅力として現れ、札幌らしい景観を形づくる重要な要素の一つです。



都市空間コンセプトと 5 つの重点方針 <資料> Well-Moving City SAPPORO 2045 ビジョン

（５）都市の魅力

「都市の魅力」を「眺望」、「夜間景観」、「雪・冬季の景観」の３つの観点から整理します。

眺望

ある場所から目にすることができる「地形・自然」、「都市の成り立ち」、「街並み」、「活動・営み」を重層的に捉えた時の景観の特徴が眺望の特徴になります。眺望は視点場、視対象、対象場の関係性によりその見え方が形づくられます。札幌における眺望の主な視点場は、地形の特徴に応じて大きく「山地」、「丘陵地」、「扇状地」、「平地」に分けることができます。これらの視点場から視対象として視認できるものとして市街地の広がりや緑地などがあります。市街地の広がりや緑地は視対象となり得るものであるのと同時に、対象場となり得るものでもあります。札幌の眺望は、視点場と視対象の関係によって、山地等の標高の高い視点場から市街地全体を視対象とする「見晴らし景（パノラマ）」、格子状道路等の見通しの良さによる「見通し景（ビスタ）」、山地に囲まれた「囲み景」の３つに分類することができます。



図 3-24 大倉山展望台から市街地を望む「見晴らし景（パノラマ）」



図 3-25 南１条通と札幌駅前通の交差点から南方向を望む「見通し景（ビスタ）」

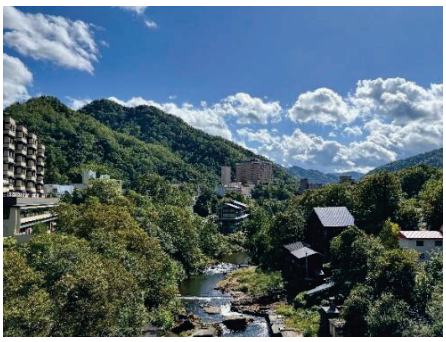


図 3-26 定山渓大橋から望む「囲み景」

コラム　視点場・対象場・視対象について

「視点場」とは視点が位置する場、「視対象」とは見る対象のことを指しますが、「対象場」とは視点場と視対象を除いた全ての対象と言われています。例えば、大倉山展望台を「視点場」とした場合で、市街地を「視対象」とすると、三角山やジャンプ台は「対象場」になります。建築等を行う際は「視対象」としての見え方はもちろんですが、「対象場」の一部としての見え方を考慮することも重要です。

夜間景観

ある場所から夜間に目にすることができる「地形・自然」、「都市の成り立ち」、「街並み」、「活動・営み」を重層的に捉えた時の景観の特徴が夜間景観の特徴になります。札幌の夜間景観は眺望との関係性から、山地等の標高の高い視点場から市街地全体を視対象とする「見晴らし（パノラマ）夜景」と格子状道路による見通しの良さによる「見通し（ビスタ）夜景」に特徴があります。また、冬季を中心に催されるイベントは札幌らしさを演出しているものが多くあるほか、スノーキャンドルによる地域らしさを演出しているものがあるなど、様々なイベント夜景があることも特徴です。

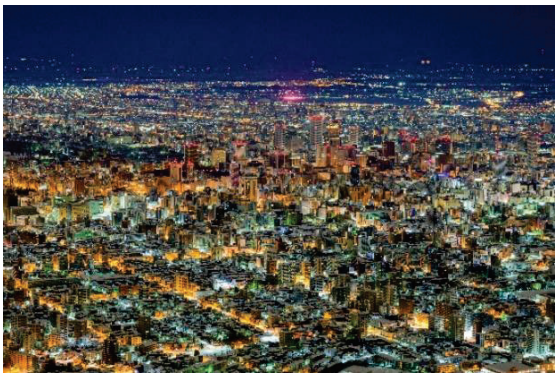


図 3-27 藻岩山展望台から市街地を望む
見晴らし（パノラマ）夜景

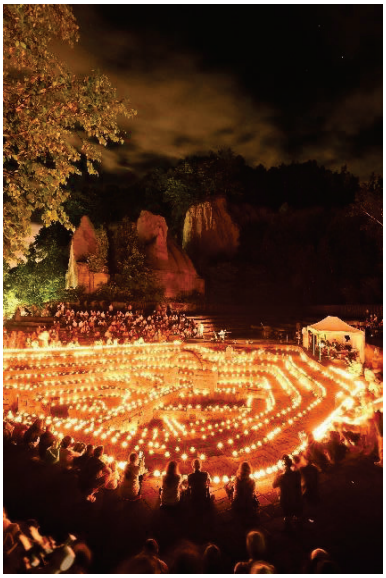


図 3-28 石山緑地のキャンドルナイトの景観



図 3-29 札幌駅前通の見通し（ビスタ）夜景

雪・冬季の景観

札幌市は「地形・自然の特徴」で整理したとおり、自然（雪）と都市が共存する世界に類を見ない都市です。冬季は一日の最高気温が氷点下となる日もあり、冷たい空気がまち全体を覆います。気象条件が重なると樹氷が見られます。

また、車道や歩道に雪が積もった様子や、除雪された雪が人の身長を超えて路肩に溜められる様子も見られます。建築物の屋根にも雪が積もり、街中の景色も辺り一面真っ白な雪景色になります。木々に目を向けると、落葉し幹だけになるものから冬季も葉をつけたままのものまでありますが、景観の中では葉の色の印象が薄まり、幹の色や深い緑の葉の

色で無彩色の印象が強くなります。晴れた日は地上に降り注いだ太陽光が雪に反射することにより光の量を多く感じられ、青い空と白い雪景色のコントラストが印象的です。曇天の日は地上に降り注ぐ太陽光が少なく、辺り一面が雪により白いことや木々の葉がほとんどないことなどから、空と雪景色とのコントラストが曖昧になり、白から灰色の印象が強くなります。街中などでは葉の落ちた街路樹に商店街や町内会等によるイルミネーションが施され、イルミネーションの光が雪に映し出され雪自体に色がついたような印象を与えています。

さらに、冬季には札幌ならではのホワイトイルミネーションやミュンヘンクリスマス市などのイベントやウィンタースポーツ等のスノーアクティビティを楽しめるスキー場があり、冬季も日中・夜間を問わずイベントやスノーアクティビティなどで雪を楽しむ人々の活動が見られます。

その他に、路面電車の線路の雪を除雪するササラ電車が走る姿は、冬の風物詩として親しまれています。



図 3-30 冬のモエレ山の景観

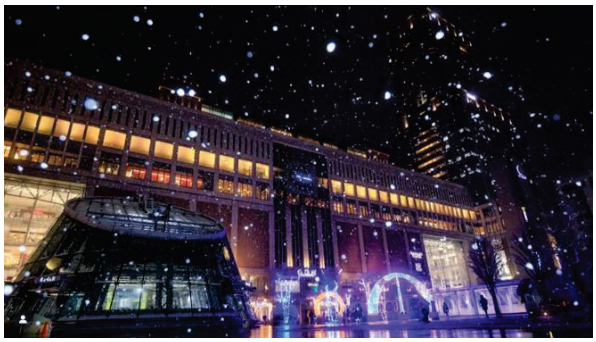


図 3-31 雪の降る札幌駅の景観



図 3-32 大通公園とさっぽろテレビ塔を望む冬の景観